留萌 いま・むかし

第五十五話

留萌港の波

留萌港の波涛はインドのマドラス沖、スコットランドのウィック沖と並んで世界三大波涛に数えられるという。これを傍証する事件が留萌港の災害史にみられる。

留萌の気象は春三月から八月上旬までは季節はずれの台風の襲来でもないかぎり穏やかな気候が続く。日本海も凪の日が多い。しかし、お盆を過ぎる頃あたりから風が強くなり、冬期間は北西の季節風が猛烈になる。留萌の海も穏やかな顔を見せることはめったにない。

大正九年は十月以降稀にみるほど時化が続き翌年まで留萌の海は荒れ狂った。最初は大正九年十月八日。天候は暴風雨。最大波浪高さ二十尺（約六m）、方向西、波長二百四十尺（約七十三m）、波の速度毎秒三十尺（約九m）。南西の風最大風速毎秒三十二mを計測した。南防波堤の函塊（ケーソン）が波の力によって移動するという事件がおきた。この大正九年という年はこの後翌年の一月までの間に大時化が六回も続き、建設中の南防波堤は大きな被害を被ることとなった。六回の大時化の中でも十二月四日のものは、天候吹雪。最大波高約七・六m、最大波長約百六m、方向北西。西の風、最大風速毎秒五十mを計り、一個二千トンの重さを持つ函塊七個が動かされ、防波堤の機能を失うという事態にまでなった。十月八日と十二月四日の波力をみると、それぞれ一㎡あたり約百二十八トンと約百四十三トンの波の力が加わったことになる。

また、戦後もこの三大波涛との闘いは続けられ、大きなものでは昭和二十四年のキティー台風、昭和二十九年の十五号台風による函塊移動があげられる。

このため、留萌港の南防波堤は他の港湾の施設と異なって、防波堤の外側に消波ブロックを積み上げて波の力を減らす工夫が施されている。ただ、尋常の波浪ではないということから、昭和三十四年、日本で最初に二十五トンテトラポットを使用した消波工を施された。

しかし、それでも時折函塊（ケーソン）が移動することが続いている。消波ブロックさえ消すことのできない波の力は世界三大波涛の名に恥じないものであろう。今日も留萌港の防波堤は波と闘っている。

留萌築港工事　南防波堤の怒濤（高約八十八）

Zing（ズィング）7月

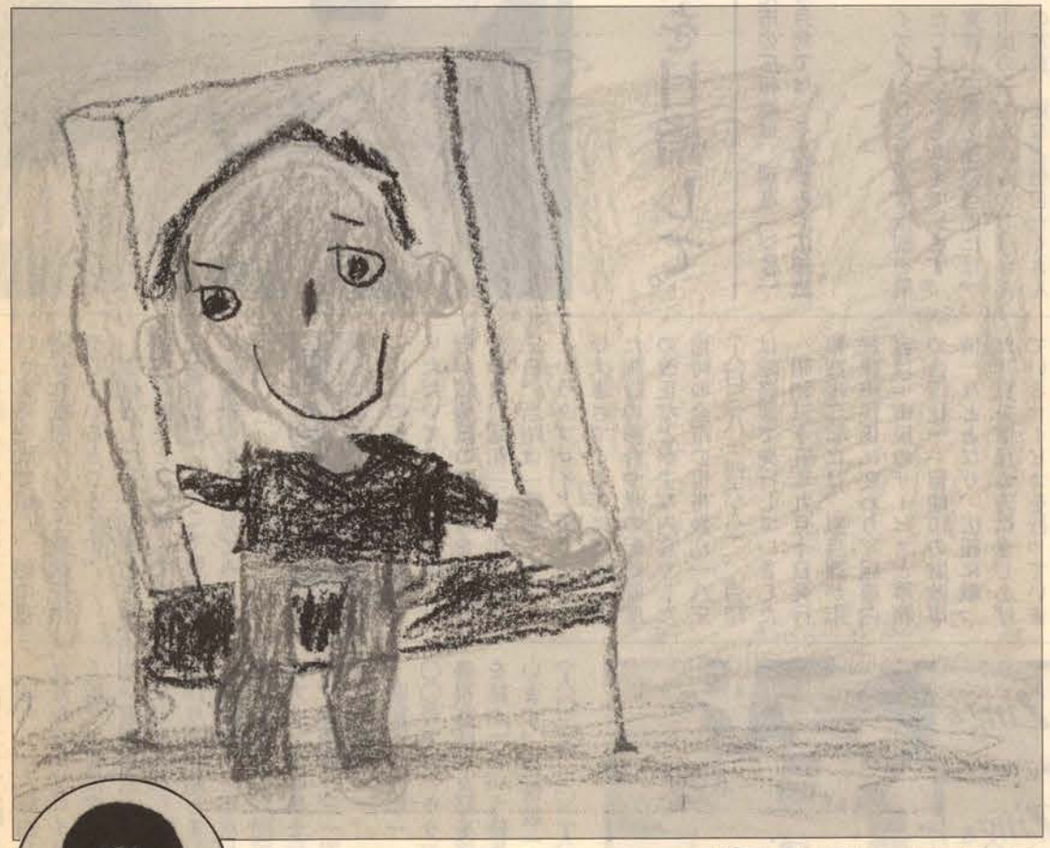
表紙の説明

明治33年留萌第1教育所として民家を借り創立。明治44年留萌第3尋常小学校。大正5年藤山小学校、この年校舎現在地に移転改築。昭和16年藤山国民学校。昭和22年留萌町立藤山小学校。同年留萌市立藤山小学校。昭和36年校舎全面新築（現校舎）。藤山の校章は昭和36年、開校60周年記念の時、作られたものです。

現校舎

ちびっこギャラリー

お子さんの絵を募集しています。☎2-1801 内線293番までご連絡ください。



「ブランコ」（留萌保育所）

なかじま　たくやくん（6歳・沖見町）

はるのえんそくに、おかあさんと見晴公園にいきました、ブランコにのったりして、くらくなるまでおかあさんといっしょにあそびました。